



1月16日（水）に、三崎中学校の中原先生がみうら学研究員に対して、先輩授業を行いました。内容は、「透明標本を使って、生物の分類をしよう」でした。

8種類の骨格透明標本をローテーションしながら、グループで話し合っ、分類わけしていきます。子どもたちは、「根拠をもって説明できる」ことを目標に、真剣に取り組んでいました。先生は、ふだん、全員発表、全員参加の授業を目指しているそうで、そのための工夫も見られました。

授業後、海洋教育部会と、みうら学研究員会のメンバーが、3つのグループに分かれ、付箋紙と模造紙を使って、協議をし、それぞれの発表をしました。



最後に、国立教育政策研究所の五島先生が、「子どもたちの興味・関心を、どのように先につなげていくかを、教師が工夫していくことが大切」とまとめられました。



1月18日（金）に、名向小学校の6年生で、岩崎先生が、みうら学研究員会を代表して授業を行いました。

大テーマは「名向と人と海と」、本時のテーマは、「よい町であるためには、何が必要か」でした。クラスの子どもたちは、自然等を「守る」グループと新しく「つくる」グループに分かれて、活発な意見を出し合いました。子どもたちが、意見を発表し、それをしっかり聞くということがよくできていました。



授業後、みうら学研究員会と海洋教育部会のメンバーが討議をし、意見を交換しました。



その後、国立教育政策研究所の五島先生から、「先生がこれまで作ってきたムードがよい。地域の良さを知ることによって、子どもたちが生き生きしてくる。それが、自分たちの自信につながる」等の指摘がありました。

また、東京大学海洋教育アライアンス海洋教育促進研究センターの田口特任講師から、「提案性の高い授業だった。自分たちでつながっていく、自分が学んだことを大切に、お互いに大切にしよう雰囲気がおもしろかった。逆に、教員がストップすることがないと、疑問が置き去りにされてしまう恐れもあるのではないか」という講評をいただきました。



（文責 事務局長 渋谷）